

Japan Audio Society JAS journal

平成21年12月1日発行
通巻400号
発行(社) 日本オーディオ協会

2009
vol.49

No 11 & 12

○ 記念特集：JAS ジャーナル 400 号記念アーカイブ

- JAS ジャーナル 400 号までの歩み
- 創刊に当たって 中島 健蔵 元会長
- 創刊に当たって 三熊 文雄 元副会長
- 表紙デザイン刷新にあたって 浅野 勇 元理事長
- 表紙デザイン刷新につき編集室から
- 月刊誌移行にあたって 伊藤 毅 元編集委員長
- 通巻 100 号の編集後記より
- 社団法人日本オーディオ協会 会長就任ご挨拶
中島 平太郎 元会長・編集委員長
- 季刊誌の発足に寄せて 中島 平太郎 元編集委員長
- 特集号・通常号の交互発刊への移行 藤本 正熙 元編集委員長
- ネット配信開始のメッセージ
- ジャーナル装丁の変遷 (1)、(2)
- 節目の各巻目次より

○ 連載：テープ録音機物語

- その 45 戦後の日本 (10)
ー ポケット型録音機 (1) ー 阿部 美春
- その 46 戦後の日本 (11)
ー ポケット型録音機 (2) ー 阿部 美春

○ JAS インフォメーション

- 2009 年度「音の日」関連行事



社団法人 日本オーディオ協会





(通巻 400 号)

2009 Vol.49 No.11/12(11・12 月合併号)

発行人：校條 亮治

社団法人 日本オーディオ協会

〒101-0045 東京都中央区築地 2-8-9

電話：03-3546-1206 FAX：03-3546-1207

Internet URL

<http://www.jas-audio.or.jp>

C O N T E N T S

○ 記念特集：JAS ジャーナル 400 号記念アーカイブ

- 3 JAS ジャーナル 400 号までの歩み
- 5 創刊に当たって 中島 健蔵 元会長
- 6 創刊に当たって 三熊 文雄 元副会長
- 7 表紙デザイン刷新にあたって 浅野 勇 元理事長
- 8 表紙デザイン刷新につき編集室から
- 9 月刊誌移行にあたって 伊藤 毅 元編集委員長
- 10 通巻 100 号の編集後記より
- 11 (社)日本オーディオ協会 会長就任ご挨拶 中島 平太郎 元会長
- 12 季刊誌の発足に寄せて 中島 平太郎 元編集委員長
- 13 特集号・通常号の交互発刊への移行 藤本 正熙 元編集委員長
- 14 ネット配信開始のメッセージ
- 15 ジャーナル装丁の変遷 (1)
- 16 ジャーナル装丁の変遷 (2)
- 17 節目の各巻目次より

○ 連載：テープ録音機物語

- 18 その 45 戦後の日本 (10) — ポケット型録音機 (1) —
 - 26 その 46 戦後の日本 (11) — ポケット型録音機 (2) —
- 阿部 美春

○ JAS インフォメーション

- 30 2009 年度「音の日」関連行事

11・12 月合併号をお届けするにあたって

JAS ジャーナルは、1958 年 5 月 1 日に創刊された「日本オーディオ協会誌」を第 1 巻、第 1 号として、1979 年 8 月には誌名が「JAS ジャーナル」と改まり、本号で第 49 巻、通巻 400 号を迎えました。創刊当時の 1958 年は、FM 放送やステレオレコードの台頭期であり、以来 51 年間にわたってデジタルオーディオやオーディオビジュアルなど、新しい技術と製品の動向を協会の動きとともに伝えてまいりました。

本号では、機関誌として節目となる号をピックアップし、表紙や目次などを抜粋して過去の 400 号を振り返ってみました。コピーが不鮮明な点はお詫びし、当時の雰囲気をお感じいただければ幸いです。

記事にまで踏み込めませんでした。諸先輩が培った技術の蘊蓄や、音楽とオーディオへの熱い思いが論文、随想、座談会として一杯詰まった JAS ジャーナルの記事を、いつの日かデジタルアーカイブとして蘇えらせたいものです。

編集事務局

☆☆☆ 編集委員会委員 ☆☆☆

(委員長) 君塚 雅憲 (委員) 伊藤 博史 ((株) D&M デノン)・大林 國彦・蔭山 恵 (パナソニック (株))・

北村 幸市・豊島 政実 (四日市大学)・長谷川 義謹 (パイオニア (株))・

濱崎 公男 (日本放送協会)・藤本 正熙・森 芳久・山崎 芳男 (早稲田大学)

JAS ジャーナル 400 号までの歩み

日本オーディオ協会の機関誌

1952 年、協会が発足した当時はオーディオの啓蒙時代であり、オーディオフェアの開催を主にした関係もあって、発足後の数年間は機関誌の発行は無かった。

当時は新しい理論や技術、そして製品が次々に発表されており、オーディオは主観的な面も持っている。協会としては会員共々に討議、議論の場を作りたい、また会員に協会の近況や業界情報などを伝えるということで、1958 年に「オーディオ協会誌」を発刊し、その補完として「JAS Report」「JAS 会報」を会員に提供するなどの変遷を経て、現在の「JAS Journal」に引き継がれてきた。

情報のネット配信時代を迎え、1996 年に協会ホームページを開設し、2006 年 4 月には「JAS Journal」を印刷・配送媒体からネット配信媒体に切替えた。

また機関誌は、会員を対象にした配布の歴史を重ねてきたが、オーディオへの関心層を広げる目的で 2006 年 4 月のネット配信開始を機に、会費無料の個人賛助会員制度を導入し配信先の拡大をはかり、2009 年 7 月よりホームページ上でバックナンバーの順次一般公開を始めることとした。

機関誌の移り変わり

年代に沿った協会機関誌の移り変わりは以下の通りである。

- 1952 日本オーディオ協会発足
- 1958 「オーディオ協会誌」発刊
(1958 年 4 月)
- 1960 「JAS Report」発刊
- 1964 「JAS 会報」発刊
(「JAS Report」より変更)
- 1979 「JAS Journal」発刊
(「オーディオ協会誌」と「JAS

会報」を合併) (1979 年 8 月)

2006 「JAS Journal」のネット配信化
(2006 年 4 月)

2007 会員向け情報メール「築地だより」
の配信開始
(2007 年 7 月より)

「JAS Journal」発刊の歴史

*1958 年 4 月 「オーディオ協会誌」発刊。

Vol.1～Vol.18 (1979 年 6 月)

学術誌と一般オーディオ雑誌の中間的技術情報誌をめざす。

内容は *討論会・座談会・講演

*技術解説 *フェア関係 ほか

*1960 年 1 月 「JAS Report」発刊 (月刊)

協会誌を補完するものとして No.1～7 を発刊。

内容は *新製品を見る会の報告 *協会の
連絡事項 ほか

*1964 年 7 月 「JAS 会報」発刊。

「JAS Report」の名称を変更したもの。

No.1～No.142 (1979 年 7 月)を発刊。

(1967 年～月刊、1977 年～隔月)

内容は *例会(ゼミナール)報告・案内

*オーディオフェア関係

*オーディオ界だより

(メーカー発表会・フェア、学会
報告など)

*新入会員報告 ほか

*1975 年 5 月 編集委員会(委員長 伊藤毅)を
編成し、今後の編集方針として技術解説論文
を主体とした。

*1977 年 2 月 「オーディオ協会誌」を季刊誌
から隔月発行誌に移行。

*1979 年 2 月 「オーディオ協会誌」から

「JAS Journal」に名称変更。
 ＊1979 年 8 月 「JAS 会報」を「JAS Journal」
 に吸収し月刊誌に移行。
 この年第三種郵便物の認可を得る。
 以降編集委員会委員名を掲載。
 ＊1988 年 7 月 編集委員長 中島平太郎就任。
 ＊1997 年 4 月 季刊と月刊の編集委員会を分離。
 季刊誌 (委員長 中島平太郎)
 特集を中心に年 4 回発刊。
 月刊誌 (委員長 出原真澄)
 トピックス、業界関連情報 ほか。
 ＊1999 年 1 月 編集委員会を一本化。
 編集委員長に藤本正熙就任。
 年 4 回特集増大号形式で発刊。

＊2002 年 7 月 月刊誌から年間 8 回刊行に変更。
 特集号を 4 回、合併号を 4 回刊行する。
 ＊2006 年 4 月 印刷配送からネット配信に切替え。
 ネット登録の個人賛助会員への配信を開始。
 編集委員会を 6 月、9 月、12 月、3 月の年 4 回
 開催し、特集号の編成等を審議。
 ＊2009 年 4 月 ホームページ上でのバックナンバ
 ー順次一般公開 (7 月より掲載開始)
 ＊2009 年 6 月 編集委員長に君塚雅憲就任。
 ＊2009 年 12 月現在、Vol.49 通巻 400 号を刊行。

歴代編集委員一覧

委嘱年	委員名	委嘱年	委員名	委嘱年	委員名
1976～1981	浅野 勇	1981～1993	高橋 三郎	1995～1997	出原 真澄
1976～1993	伊藤 毅	1981～1995	則安 治男	1997～2001	相澤 宏紀
1976～1998	中島 平太郎	1984～1995	菊田 俊雄	1997～2004	高須 昭彦
1976～1993	三浦 種敏	1989～1995	六澤 健明	1997～2000	宮坂 栄一
1976～1996	山本 武夫	1989～1995	石井 伸一郎	1997～	大林 國彦
1976～1989	朝倉 昭	1989～1995	春日 二郎	1997～	北村 幸市
1976～1989	江波戸 考吉	1989～1996	佐伯 多門	1997～	森 芳久
1976～1989	阪本 梢次	1989～1996	伏木 薫	1997～1998	長澤 祥
1976～1989	志賀 健雄	1989～	藤本 正熙	1997～1998	上柿 力
1976～1989	伊達 陽	1989～	山崎 芳男	1998～1999	茨木 悟
1976～1989	富田 義男	1991～1995	中林 克己	1999～	豊島 政実
1976～1989	藤田 尚	1993～2007	高田 寛太郎	1999～	蔭山 恵
1976～1983	和田 正三郎	1993～1995	山口 公典	2000～	濱崎 公男
1976～1980	宗友 参雄	1993～1996	沢口 真生	2000～2003	石渡 良一
1977～1995	松岡 進	1993～2000	渡邊 周	2001～2006	森下 正巳
1977～1985	浅見 啓明	1995～1996	田辺 逸雄	2003～	伊藤 博史
1978～1989	佐藤 佐	1995～1996	豊島 政実	2006～	長谷川 義謙
1978～1989	安田 庸三	1995～1996	竹ヶ原 俊幸	2009～	君塚 雅憲
1978～1981	雁金 達	1995～1998	木村 陽一		
1978～1996	吉川 昭吉郎	1995～1999	永田 穂		

創刊にあたって

中島 健蔵 会長

1958 年 4 月号 (Vol.1 No.1 通巻 1 号)

日本オーディオ協会会長 中 島 健 蔵



日本オーディオ協会が生れた時には、ほんの少数の同好者の集りであった。同好者といっても、いわゆるレコード・ファンではなく、通信工学や音響関係の専門家や、メーカー関係の人々が多く、そのころはまだ初歩的な問題についても疑問が多く、互に材料を持ち寄り、実験を見せ合い、いつも議論の花が咲いて、まことにたのしい空気がかもし出されていた。

専門家の集りで、意見のちがいがあると、とかく陰気な空気になり、おもしろくなくなるのが常であるが、オーディオ協会は、そんな息のつまらない気もちにならなかった。

「可聴音高忠実度録音及び再生」という長い訳が「オーディオ」に対して与えられた。はじめは、ピックアップ・マイクロフォンから、プリアンプから、メインアンプから、スピーカーにいたるまで、疑問だらけであったが、やがて、第一回のオーディオ・フェアが開かれ、それが大きな刺激になって、メーカー製品もどんどん出はじめた。立体放送もNHK民放の協力で実現した。オーディオ関係の知識もどんどん高まって、最近では、わざわざハイ・ファイなどと銘打つことがおかしいほどになった。

レコードといえば、LPのことになり、立体再生用のテープやレコードも、もはや実験の域を脱して来た。ことに、テープ・レコーダーの発展が目ざましく、さらにFM放送も開始され、数年前のことを考えると、まるでうそのようである。

実をいうと、メーカー製品が向上したために、オーディオのアマチュアの活躍範囲がだんだん狭くなって来たようである。そうなることが理想であったにしても、これはいささか淋しい気持である。しかし、研究の余地は無限に残されている。メーカー製品も、現在のレベルで安心しているわけにはいかないはずである。

専門的であると同時に、広く役に立つような資料を公表したいという考えは、協会設立当時からあった。しかしなかなか実現するまでにいたらず、オーディオ・フェアの時に「オーディオ資料」を出してお茶をにごしていたが、やっと会誌の形で、望みを果す見こみがついた。大へんにうれしいことである。

オーディオ協会は、大きな刺激を各方面に与えたが、啓蒙時代はすぎたようである。ハイ・ファイといえば、低音と高音とが誇張されたドン・シャリ音と誤解され、ハイ・ファイ排撃論まで出たが、こんな話は完全に過去のことになった。単に高忠実度を物理学的に、あるいは電子工学的に考えて満足していた時代も過ぎた。「臨場感」の問題もいろいろと考えられているし、建築音響の問題もだんだん深く掘り下げられて来た。感覚を理学も応用され、心理学も縁がないどころか、大いに利用されようとしている。オーディオの世界は、一見間口が狭いようだが、一旦中にはいってみると、底ぬけに広いのである。もはや、少数の同好者だけの世界ではない。社会的な問題でもあり、経済的な問題も考慮しなければならない。

しかし間口をひろげるばかりが能ではない。協会としては、時には広く、興味のある問題を取り上げて、この仕事をつづけていくべきであると考えます。

創刊にあたって

三熊 文雄 副会長

1958 年 4 月号 (Vol.1 No.1 通巻 1 号)

日本オーディオ協会副会長 三 熊 文 雄



今度協会誌が発行されるということを知り、こんな嬉しいことはない。以前から協会誌の発行については何回となく話が出たが、仲々実現しなかったことであり、その原因もいくつかあって、多くの希望がありながら実現しなかったことなので、この発行については実にうれしく思っている。

自分自身多くの学協会に関係してその会誌を編集した経験もあるが、どこの学協会とも経済的に恵まれず、編集者は一生懸命努力しても会費未納その他の原因で、経済的に困り、最悪の場合は廃刊せざるを得なかった経験もある。本協会も経済的には何らの基盤もなく、会員諸兄の会費で賄うしか方法がないので、どうか

本誌が継続してゆけるようこの際念願しておく。

編集に当る諸兄は並大抵の苦勞ではなく、その立派な成果が少数の心ない未納によって瓦解するようでは甚だ申し訳ないと思って老妻心でいうので、本会員に限りその様なことはないと思うが、心安がてらうのでその点御容赦の程御願ひ申す。

また、本会誌を編集される方々に御願ひしたいことであるが、本会誌は勿論学術誌ではない。といって一般のアマチュア雑誌でもない。会員相互の意見の発表、考え方の発表上重点がおかれるのが至当だと小生は思っている。本協会の目的にも会員相互の技術の向上ということがあったかと思うが、今迄の会合を通して見ても、お互に勝手な議論（少し云い過ぎかな！）をし合うのが、この会の使命のような気がしている。オーディオそのものが各々の主観による点が多くて、必ずしもこれでないといふと絶対に良くないというものではない。例えば何々式アンプとか、何々型アンプとがあって、その優劣を盛んに議論するが、いずれもある程度十分な理論と経験によって作られたもので、その優劣は仲々簡単には出せないのに、それをいとも簡単に甲はよくて乙が悪いという人もあり、その逆に乙がよくて甲が悪いという人もある。この例を見ても多くは主観から来る問題で、多くの人の裁きがないとどちらに軍配を上げてよいか判らない。このようなことを考えると、この会誌の編集方針としては、そのような議論を多く採り上げ、会員相互で議論を出し合つて結論が出せるように考えて欲しい。従って討論会の記事などを多くするのもよいであろう。またある問題について異なった意見を互に記載し、会員からの反響を次号に載せて検討し合うのも結構かと思う。

要するに他の会誌とは何らか違った特色あるものに出来たなら幸々と思っている。何分うるさ型の多い会であるから全員に満足できるような編集は難しいと思うが、却ってこのような会員であればある程親身になってバックアップするものと思う。どうか今後とも長く皆が喜んで読めるように御努力御願ひしたい。本誌の発行に際し、勝手な御願ひばかりで申し訳ないが、今後の発展を祈って編集する。妄言多謝。

表紙デザイン刷新にあたって

浅野 勇 理事長

1979 年 2 月号 (Vol.19 No.1 通巻 56 号)

JAS journal

Vol. 19, No. 1

目次



巻頭言

- 1 巻頭言・浅野 勇
- 2 現代オーディオ技術を考える・浅見啓明
・阪本 倫次・伊藤 毅・松岡 進・佐藤 佐
・志賀健雄・三浦種敏・宗友参雄・安田庸三
・和田正三郎・山本武夫
- 13 デジタルオーディオの動向・矢作孝市
- 19 遅延回路について・佐藤 茂
- 24 オーディオと私・松本 望
- 26 続・続・虫の音の秘密を探る・松浦一郎
- 29 強力超音波とその応用・森 榮司
- 35 静電気の話・村崎憲雄
- 45 日本音響学会昭和53年度秋季研究発表会より
音響機器部門・若栗 尚・中林克己／聴覚部
門・大串勉吾／建築音響部門・橋 秀樹
- 23 新刊紹介 34 専門誌推進レコード
- 43 新製品ニュース

日本オーディオ協会誌編集委員

- | | |
|-----------|--------------------|
| 咽 倉 昭 | 〈品川無線社〉 |
| 浅 野 勇 | 〈日本オーディオ協会理事長〉 |
| 浅 見 啓 明 | 〈NHK制作技術局〉 |
| ○伊 藤 毅 | 〈早稲田大学理工学部教授〉 |
| 江波戸 孝吉 | 〈日本オーディオ協会理事(財務)〉 |
| 服 金 達 | 〈NHK技術本部〉 |
| 阪 本 倫 次 | 〈松下電器産業株式会社音響研究所〉 |
| 佐 藤 佐 | 〈不二音響社〉 |
| 志 賀 健 雄 | 〈日本コロムビア株式会社海外事業部〉 |
| 伊 達 陽 | 〈日本オーディオ協会事務局長〉 |
| 富 田 義 男 | |
| 中 島 平 太 郎 | 〈ソニー株式会社技術研究所〉 |
| 藤 田 尚 | 〈NHK総合技術研究所〉 |
| 松 岡 進 | 〈トリオ社〉 |
| 三 浦 種 敏 | 〈東京電機大学工学部教授〉 |
| 宗 友 参 雄 | 〈日本オーディオ協会理事〉 |
| 安 田 庸 三 | 〈安田田リサーチ〉 |
| 山 本 武 夫 | 〈パイオニア株式会社音響研究所〉 |
| 和 田 正 三 郎 | 〈キング・レコード社〉 |

五十音順・○印刷編集委員長

「日本オーディオ協会誌」も第19巻第1号目を迎えることとなった。本号から表紙の意匠を一新して、ご覧の通りの姿となったが、これは機会をみて従来の隔月発行を月刊に移行する準備でもあり、第三種郵便物の認可を得て、会員各位との一層密な接触を考えた編集委員会の結論でもある。

記事内容も一般のオーディオ誌とは一線を画した協会誌らしい内容の充実をはかってゆきたい。

隔月にて協会誌と交互にお届けしている「JAS会報」についても内容を一新して、最近の話題やオーディオ新製品のニュース速報を盛り込むなど、会員各位のアンケートに応じてお伝えできるような形態をとりたいと考えている。

オーディオ技術の急速な進展は、次第に難解の度合いを深めているが、正しい認識を持つことが望まれている。日本オーディオ協会は「正しいオーディオ知識の普及」を目的に設立され、活動を続けてきたが、年をおいて難解さを加える技術の推移を把握することは容易ではない。

最近のドライになり勝ちな日常生活に潤いを与え、満ち足りた精神生活の一助としてオーディオが果たしている役割は大きい。オーディオ機器の普及率は60%に達したという。テレビに次いで大きなシェアである。この膨大なオーディオ人口のうち、真にオーディオを満喫している人の比率はどのくらいだろうか、と考えると、その過半数にも達していないように思う。

オーディオ協会に集う会員の方々は、いずれもオーディオに多大な関心を持つ人ばかりである。いわばオーディオ愛好者のリーダーともいえる立場にある。協会誌を通じて会員各位の相互の結び付きの緊密化をはかることは大きな意義がある。協会誌の脱皮をはかったことも、今後のオーディオ界の動きに即応できる態勢をとったのだ、とご理解いただきたいと思う。

日本オーディオ協会も2年後には創立30周年を迎える。同好会としてこのように長期継続した例は珍しいといわれるし、中島会長をはじめ理事の方々も協会創立以来ご協力いただいていることを誇りに思う。(浅野 勇)

表紙デザイン刷新につき編集室から

1979 年 2 月号 (Vol.19 No.1 通巻 56 号)

スピーカー (1.5, ホーン型, 300~8 kHz, 合計 8 個) を配置している。

イメージスピーカーの出力レベル、遅れ時間などは客席各部でエコーや音像移動が生じないよう調整されている。

図10に示す客席部の一点で測定されたエコータイムパターンにおいて、センタースピーカーのみの場合に比べて、イメージスピーカーを入れることにより 50 msec 以後の反射音が増加していることがわかる。

このようなオペレーションにより、客席部における両耳間相関係数は減少することを確認しており、野外劇場でもある程度 Spatial Impression を増大させることが可能であるとしている。

3. む す び

以上の研究発表以外にも筆者の興味を引いたものとしては、「主観的ブリッフォレンスに基づくホールの改修例」(安藤他)、欧米で盛んに研究が進められている Open Plan に関する「中央大学新校舎の音響特性とその問題点」(浪花他)、また音響測定法に関して「デジタル技術を用いた室内の空間情報の一測定法」(斎藤他)、「残響曲線の空間平均 (1)」(川上他) など数多くあるが、誌面の関係から割愛させて頂く。

【編集室から】

本誌「日本オーディオ協会誌」は昭和33年5月に創刊され、当時のオーディオ愛好者の間で大きな話題を巻き起こしました。以来20年を超えた今日、本誌は隔月刊として定着し、通巻第56号を迎えました。

創刊当時と今日とでは、オーディオ界の状況はまったく異なりますが、常にオーディオの最先端とユーザーとを結び付けるパイプの役割を果たしてきました。近年では、国内はもとより、広く海外においても「JAS Journal」の名称で親しまれるようになりました。

本号から表紙を刷新しました。これは道端享デザインによるもので、毎号色変わりとします。本誌のより一層の世界躍進の願いをも込めたものです。



●それが何であろうと、趣味と名のつく世界には、人をひきつけ、魅了する魔力が秘められている。ひとたび、この魔力に魅せられると、人はそれにひき込まれ、のめり込み、元にはひき返すことは容易ではない。オーディオという趣味も例外ではない。●オーディオという混沌と神秘の世界へ足を踏み入れたものは、その混沌を探り、神秘を解き明かすべく歩み出す。道程は長く険しく、その行き着く先は「ドロ沼」ともいわれる。●足をとられドロにまみれつつも、掘り下げ奮闘を続けるものを見て、傍観者は間にかける。「一体、何のために？」と。●趣味に目的はない。社会的名声や金銭を得るためならば、それは趣味ではない。すべてにわたり合目的的行動が要求される現代社会にあって、明確な目的を有さず、ただ目標だけが存在するのが趣味である。●しかし、特定のモノを追究する真摯な姿といえども、常に美しく他人の目に映るとは限らない。時には異様または滑稽に見られ、失笑をかうこともある。昔の人は、それを「電音狂」とか「音痴狂」と評し、今日では「マニア」と呼ぶ。●Mania とは熱狂、臆病を意味する言葉であり、自衛的に自ら名をのめる以外は、与えられて単純に喜ぶべき称号ではない。ドロ沼に墮ち、気付いたときには、社会は遠く去り、宵空だけが頭上に広がる。マニアとは、そうした社会から隔絶され、自らの趣味の種のなかだけに埋没した臆病者を指すともいえるからである。●趣味それ自体は格別に尊いものではない。尊いのは、その趣味を趣味とする人の心である。趣味をもつ人の心は広くその日は大局を忘れてはならない。趣味を通して社会を見るばかりではなく、社会を通して自らの趣味を振り返る余裕こそ趣味人の大切な心得といえる。(おしびき)

日本オーディオ協会誌 (Vol. 19 No. 1)

昭和54年2月25日 発行 ◎

頒布価 円600 [年間 円3,000 (送料共)]

編 集 人 伊 達 陽

発 行 人 浅 野 勇

発 行 所 日本オーディオ協会

東京都渋谷区神宮前1-14-34 森ビル

電話 (03) 6649

月刊誌移行にあたって

伊藤 毅 編集委員長

1979 年 8 月号 (Vol.19 No.4 通巻 59 号)



JAS Journal Vol. 19, No. 4

— 目 次 —



本誌の月刊移行にあたって

- 1 本誌の月刊移行にあたって・伊藤 毅
- 2 オーディオ諸問題と光学的手法・米山正秀
- 12 会長に井深 大氏
- 13 “よい音”とは・二階堂誠也
- 18 新刊紹介
- 19 標準マイクロホン・吉川昭吉郎・三浦 甫・溝口章夫・山本武夫
- 27 新製品ニュース
- 28 オーディオと私・五代 武
- 30 水中音響とその応用・笹谷昌男
- 38 第63回AESコンベンションに出席して・小暮拓世・松本美治男
- 44 協会だより

本誌は昭和33年5月に創刊され、オーディオに関する先端技術の解説、紹介や話題の数々を提供しつつ今日に至った。しかしながら、過去においては、とすれば不定期刊行物に墮しがちな傾向は否定できなかった。

そこで、日本オーディオ協会では、新たに編集委員会を組織し、昭和51年6月発行のVol.16, No.1より従来の悪弊を改め、季刊として定着させるとともに、その内容の充実を努めた。

その結果、翌52年2月発行のVol.17, No.1より隔月発行に踏み切ることができた。

以来、オーディオ愛好者およびオーディオ技術者の知見と教養に益することを編集方針に、記事の充実と向上をはかってきた。

他方、本年2月発行のVol.19, No.1からは“JAS Journal”という誌名を冠し、表紙のデザインもモダンなものに更新してきた。

そして、本号より正式に誌名を“JAS Journal”と改め、月刊誌として発行することになった。これによって、長年にわたる読者の希望に沿うことができるばかりか、一般の学会誌や協会誌などと肩を並べられるようになったことは、まことに喜ばしいことである。これもひとえに本誌編集委員会の皆様と協会事務局の方々のたゆまぬ努力の賜であると同時に、読者の皆様のご多大なるご支援による結果であると深く感謝している。

本誌の内容は、概して学術的ではあるが、いうまでもなく学会誌という性格のものではない。本誌は、オーディオに関係する技術者や研究者および愛好者に喜ばれそうな内容の記事を、あるものは専門的に、あるものは入門者のレベルに近い程度に記載し、読者のオーディオ技術に関する知見を深め、かつ広めることに役立てようということを目標として編集している。

したがって、エレクトロニクスの基礎から音楽に関するものまで、かなり広い範囲にわたっているが、主流は常にオーディオ技術である。

今後も、しばらくはこの方針をもって編集していくつもりであるが、読者の皆様からのご意見やご要望が寄せられれば幸甚である。

(伊藤 毅)

本誌編集委員

朝 倉 昭	＜品川無線社＞
浅 野 勇	＜日本オーディオ協会＞
浅 見 啓 明	＜NHK制作技術局＞
○伊 藤 毅	＜早稲田大学理工学部＞
江波戸 孝吉	＜日本オーディオ協会(財務)＞
麻 全 達	＜NHK営業総局＞
阪 本 樹 次	＜松下電器産業研究所＞
佐 藤 佐 一	＜不二会響社＞
志 賀 健 雄	＜日本コロムビア海外事業部＞
伊 達 陽 一	＜日本オーディオ協会＞
富 田 義 男	＜横浜国立大学工学部＞
中 島 平 太 郎	＜ソニー技術研究所＞
藤 田 尚 一	＜NHK総合技術研究所＞
松 岡 進 一	＜トリオ機＞
三 浦 種 敏	＜東京電機大学工学部＞
宗 友 参 雄	＜日本オーディオ協会＞
安 田 清 三	＜新ヤスダ・リサーチセンター＞
山 本 武 夫	＜パイオニア技術研究所＞
吉 川 昭 吉 郎	＜日本電信電話公社東京電気通信研究所＞
和 田 正 三 郎	＜キング・レコード機＞

五十音順・○印編集委員長

通巻 100 号の編集後記より

1983 年 2 月号 (Vol.23 No.2 通巻 100 号)

毎 年恒例の JAS 新年パーティーが 1 月 11 日午後 5 時から、原宿の東郷記念館バニフィックホールで行われました。このパーティーは、オーディオ愛好者、メーカー関係者、技術者、研究者、評論家、さらにディーラー関係者等が一堂に会して懇談するという他に例をみないユニークなものです。今回欠席された方も、来年はぜひご出席下さい。今回の出席者は 170 名に及びました。▲



▲ 新年パーティーの会場風景

日本オーディオ協会が編集・発行を企画している「オーディオ 50 年史」は、その執筆が急テンポで進んでおります。この企画は長い年月にわたり「開店休業」に等しい状態が続いておりましたが、2 年ほど前から、資料収集等が一段落し、順調に進捗をはじめました。一部の部門ではすでに第一次原稿が上がり、他部門も着々と執筆されています。今後、これらの原稿の見直しや補完等を慎重に行い、できるだけ早く発行したいと考えています。▲



▶ 性格判断とか運勢判断というものがある。性格や運勢は簡単に決めつけられるほど単純ではない。にもかかわらず、的を得ているように思われることも少なくない。▶ その理由の一つは表現の魔術にある。おごそかな宣託のなかには「反面」「他方」「しかし」「ただし」「ときには」といった言葉が必ず入っている。相反する評価を巧みに並置したり、例外を設定しておいたりする。例えば「物事に大ナタをふる傾向がある反面、ヨイソリで鋭くえぐるような……」などとなる。▶ 相手は、当たっている側を優先的に受け入れる。逆える者は白か黒かを明確にしたい願望をもつからであろう。これに政治家的「灰色」または「玉虫色」の表現技術を加えておけば完璧である。▶ オーディオ機器や自動車の評価記事は、それを所有し長期間使用した後で読むと、よく理解できることが多い。「風見鶏的」な読み方のせいかもしれない。▶ 抽象的価値の評価・判断およびその表現は難しい。その難しさゆえに、または非難を避ける賢明な手法として、予言者のまたは政治家的表現が生まれる。この表現の妙を解明しながら読むのも楽しい。(あしびき)

本 誌「JAS journal」は、この 2 月号で通巻第 100 号を迎えました。ご承知の通り、本誌は昭和 33 年に創刊された「日本オーディオ協会誌」を前身とします。約 25 年を要して 100 号を発行したわけであり、また 100 号という数字自体も誇るほどのものではありません。むしろ、雑誌としてはヒヨコの部類に属します。そうした意味で、本誌では 100 号を記念した記事は特にありません。この 100 号を一つの節目として、今後さらに拡充・発展させていきたいと考えております。なお、本誌制作にご協力いただいているデザイナー遠藤 享 氏、技術出版編集長波十三男氏、福音印刷製版に対し、ここに改めてお礼申し上げます。▲

本誌編集委員会委員

朝 倉 昭	〈品川無線機〉	中島 平太郎	〈アイワ社〉
浅 見 啓 明	〈日本放送協会〉	財 安 治 男	〈ローランド社〉
○伊 藤 毅	〈早稲田大学〉	藤 田 尚	〈上野学園大学〉
江波戸 孝吉	〈日本オーディオ協会〉	松 岡 進	〈トリオ社〉
阪 本 哲 次	〈松下電器産業社〉	三 浦 健 敏	〈東京電機大学〉
佐 藤 佐	〈不二堂製機〉	安 田 唐 三	〈千葉大学〉
志 賀 健 雄	〈日本コロムビア社〉	山 本 武 夫	〈バイオニア社〉
高 橋 三 郎	〈日本オーディオ協会〉	古 川 昭 吉 郎	〈長岡技術科学大学〉
伊 達 陽	〈日本オーディオ協会〉	和 田 正 三 郎	〈日本レコード協会〉
富 田 義 男	〈横浜国立大学〉		〔〇印委員長・50 音順〕

JAS journal

1983 年 2 月号

(Vol. 23, No. 2 通巻第 100 号)
昭和 58 年 2 月 1 日発行 ©1983
〒400 〔年間 4,000 円送料別〕

発行人 井 澤 大
発行所

日本オーディオ協会

〒150 東京都渋谷区神宮前 1-14-34
電話 東京 03 (403) 6 6 4 9

ISSN 0388-158X

社団法人 日本オーディオ協会 会長就任ご挨拶

中島 平太郎 会長・編集委員長

1992 年 7 月号 (Vol.32 No.7 通巻 213 号)



本 7 月 1 日付けで、社団法人日本オーディオ協会が認可され、公益法人として新発足することになりました。ご同慶にたえません。また、その会長に私が選任されました。大変光栄なことと存じますとともに、その責任の重さを痛感しております。

昨年 1 月に開催された理事会で、協会発足 40 周年を契機に、協会の基盤強化と事業の一層の発展をめざして、任意団体日本オーディオ協会の法人化を推進することが決議されました。それをうけて井深会長を委員長とする法人化委員会を結成して準備をすすめて参りました。平成 3 年 4 月、この委員会でもとめた法人化のための設立趣意書、事業の目的、計画などを整え、通商産業省に提出しました。その後、同省の御指導の下に、関連諸業界との調整、関係者間の体制を整え、平成 4 年 6 月 15 日の設立総会を経て今日に至りました。昭和 27 年、オーディオ協会が設立されてから 41 年間、中島健蔵会長、井深大会長を軸として培われてきたオーディオの心を継承し、引いて戴いたオーディオの路線を起点として、オーディオおよびオーディオビジュアルの分野において幅広い活動を展開してゆきたいと考えております。

80 年代は、CD、DAT、衛星放送にみるように、オーディオシステムの中で、品質的に弱い部分であるパッケージおよび伝送メディアの部分をデジタルで置き換える作業がなされ、ほぼ完了しました。90 年代は、これまでに蓄積したデジタル技術を駆使して高効率符号化、高密度化、音響信号処理、音場の創成などを実現し、新しいオーディオシステムを構築する時代だと思います。そしてその有効な活用のためには、どういう目的で、何を実現したいのか、それにはどういう処理が必要なのかというファームウェアが先行開発されることが必要となります。つまり、オーディオでは、デジタル技術でシステムを置き換える“デジタル化”の時代から、それによって新しいシステムを作り上げる“デジタル駆使”の時代に移ってきたといえましょう。その一つのあらわれが DCC であり MD であろうかと思えます。

オーディオビジュアルについては、従来 AV 家電といわれたきたテレビやビデオは、ソフトの面からみても、ハードの面からみても、どちらかと言えば情報中心の情報家電的性格のものであったと言えましょう。90 年代に入って、EDTV、ハイビジョン、シアターなど、画面の大型化とワイド化が図られ、ソフトもそれなりに充実しつつある現段階でやっと AV 家電といえる領域にきたように思われます。これで、オーディオとビジュアルとを AV として取り上げ、“映像共生の收音技術および再生音場”への展開などを本格的に取り上げる時期になってきました。これからが私達の出番ではないでしょうか。

以上のような、オーディオおよびオーディオビジュアルの分野において、快い音の追求、よい音を楽しむというオーディオの理想を実現するには、ソフトとハードならびにユーザーの有機的な協調が必要で、それをふまえ、21 世紀にむけて、わが国オーディオ界の発展のために、オーディオを愛する皆様とともに努力してゆきたいと考えております。

季刊誌の発足に寄せて

1997 年 4 月号 (Vol.37 No.5 通巻 271 号)

JAS journal

Vol. 37, No. 5

(通巻第 271 号)

1997 年 4 月号臨時増刊

春 号

▶▶ 目 次 ◀◀



1997 © Japan Audio Society

「やさしく、そしてハイレベルに」
これが本号より新たに発足した JAS
ジャーナル季刊誌の編集方針です。

ある定めた題目に対して、その概
要はオーディオに関心を持った高校
生にも理解して貰えるように、同時
に現在の高水準の技術レベルにも言
及し、その題目については、今日の
時点で技術の全容を難易あわせて盛
り込みたいという大変欲張った企画
です。

本第 1 号は、どちらかといえば基
本技術の解説を中心にまとめました
が、次号からはその時々のテーマを
題材にした特集を組み、同時にその
特集にかかわる基本技術を配します。
例をとって説明しましょう。7 月発
行予定の次号では、「DVD」を特
集します。そしてそれに関連する基
本技術として、DVD の信号圧縮を
も包含した「MPEG 技術」と、そ

- 5 オーディオにおける DSP の応用 毛利智博, 佐藤康夫
• DSP とは • DSP IC のコア技術
• DSP とオーディオ技術への応用
- 21 高速 1bit 信号処理 山崎芳男
• アナログ信号のディジタル化 • $\Sigma\Delta$ 変調
• 高速標本化・1bit 量子化
- 29 バイオニア 98kHz×24ビットサンプリング対応
高精度サンプリング・レート・コンバータについて.....
.....岩村 宏, 寺尾恭一
- 36 CD-R 中島平太郎
• CD-R の概要 • CD-R ディスク
• CD-R 記録機 • 今までの歩みと利用の実際
• CD-R の発展のために
- 49 レコーディング・スタジオにおける記録メディアと
最新のノンリニア・ソフト制作ツール.....石野和男
• ノンリニアシステム18機種種の紹介
- 70 マルチチャンネル音声の動向と NHK の取り組み.....
.....沢口真生, 深田 晃

の中の音声圧縮の基本になっている
聴覚の「マスキング」をとりあげま
す。もちろんこれらの基本技術は、
特集の DVD に深くかかわりますが、
それだけでなくもっと広くとら
えて解説します。そしてその技術が

季刊誌の発足に寄せて

オーディオやオーディオビジュアル
にどうかかわっているのか、将来ど
う展開してゆくのかについても盛り
込みたいと考えています。

同様に、10月発行の季刊誌ではス
ピーカと再生音場を特集し、超高音
域でのきこえや超高域の音場につい
て、98年1月発行分では、その頃オー
プンされる第2国立劇場を念頭にお
いて、スタジオやホール、話題のド
ームなどについての特集を予定してい
ます。

前号に会告しましたように、JAS
ジャーナルは4月より月刊誌と季刊
誌の2本立となります。月刊誌は新
たに編集委員長を委嘱した山崎眞澄
氏が今までとまったく違った発想で
編集をすすめられました。その編集
方針については、本誌と同時に届け
する第4号をご覧いただければ、多
くを語るなくてもお解りいただける
ことと思います。月刊誌と季刊誌と
は相補う車の両輪として、オーディ
オおよびオーディオビジュアルの発
展と活性化に役立てるよう推進して
参ります。

読者の皆様におかれても、新しく発
足した2つの機関誌に対し、それぞ
れの立場からの建設的なご意見やご
提言をお寄せください。私達はそれ
に対して感度よく迅速に対応します。
本誌が皆様方との対話の場となるこ
とを念じています。(中島平太郎)

特集号・通常号の交互発刊への移行について

2002 年 7 月号 (Vol.42 No.7 通巻 341 号)



(通巻341号)

2002 Vol. 42 No. 7

¥1,250 (消費税別)

オーディオエキスポ関連
インターネット<http://www.jas-audio.or.jp/>

C O N T E N T S

- 4 JAS インフォメーション
相澤副会長招典
前会長「中島平太郎さんに感謝する会」開催
デジタル圧縮オーディオ検討委員会報告
- 10 ニュースダイジェスト
NHK放送技術研究所の総合整備
クラフトスピーカーについて
- 13 イベントレポート
プロフェッショナルオーディオ総合展2002
DVDオーディオ体験試聴会IN秋葉原
SACDコンファレンスJAPAN2002
第112回AESコンベンション報告
NHK放送博物館「フラットハラー線路コンサート」予告
- 18 ニューテクノロジー
音楽演出インターフェース技術「ミュージックソムリエ」
- 22 メンバースプラザ
自薦ソフト紹介
- 24 データファイル
電子製品の国内普及率/レコード生産実績
- 29 JASコミュニケーション

JAS Journal 第7号をお届けするにあたって

編集委員長 藤本 正 照

協会の情報提供事業は従来月刊JASジャーナル誌を中心に行ってまいりましたが、インターネットの普及などにより、情報入手手段が多様化かつ迅速化する時代における協会の情報提供のあり方が問われています。

本年年初に実施した会員の皆様対象のアンケート調査にご協力いただき、貴重なご意見をたくさんいただきました。その後協会役員各位の大所高所のご意見もいただきながら、編集委員会での議論を重ねてまいりました。

情報が溢れ、掘り下げが足りないといったお叱りの一方、協会と会員間の大切なコミュニケーション手段である、オーディオ文化の前進に情熱を傾ける有志、とりわけ新進の技術者にとって報告の場としての役割は貴重であるなどの励ましのご意見もいただきました。

要約いたしますと、オーディオ・オーディオビジュアルに造詣の深い会員の皆様に一層のお

役に立つ情報源になるとともに、協会の活動状況を広報し今後のオーディオ文化を支える新会員の増強につながる新たな魅力づくりも必要とされ、これらにお応えする機関誌への変革が求められております。

当面、テーマを絞ってオーディオ、オーディオビジュアルの新技術動向を展望し、会員間の建設的な意見交換の活性化を目論むテーマ特集号を10月以降季刊で発刊し、各季刊号の間に本号でご覧いただくような協会関連情報をタイムリーにお届けする通常号を発刊いたします。情報の迅速化のためのネットワーク活用につきましては引き続き検討を進めます。

会員の皆様におかれましては、当面の編集方針につきご理解を賜りますとともに、引き続き情報提供事業にご支援ご協力を賜り、ご意見をお寄せいただきますようお願いいたします。

ネット配信開始のメッセージ

2006 年 4 月号 (Vol.46 No.4 通巻 370 号)



C O N T E N T S

- 2 特集 オーディオ・オーディオビジュアルと仕環境 特集にあたって
- 4 多目的ルームの普及を促進しよう
- 9 リビングシアターと仕環境
- 13 オーディオとあかり
- 17 制作スタジオと一般家庭のサラウンド再生環境の接点
- 25 JASインフォメーション
平成18年度の協会運営について、平成18年3月度定例理事会の報告
入会費及び会費額の改定について
- 27 メンバースプラザ
会員ソフト紹介
- 29 連載: データベース機器紹介
その15 戦後のアメリカ (5)

「JASジャーナル」をお届けするにあたって

より多くの音の仲間にお読みいただくことを目的として、ネット配信に切り替えた第1号の「JASジャーナル4月号」をお届けします。

4月号は、編集作業の都合で従来のJASジャーナル誌に近い編成でお届けしますが、今後はニュースダイジェスト(A・AV分野のニュース・トピックス)、イベントレポート(各種イベントの内容レポートと予告)、ニューテクノロジー(A・AV分野の新技术・開発内容の紹介)、オーディオ・ビジュ

アルベーシック(初心者向けのA・AV基礎知識)、メンバースプラザ(会員提供の情報や記事、A・AVの活動紹介、体験記)、データファイル(A・AVライフに役立つ便利帖など)の充実に努めます。会員の皆様の記事提供や投稿大歓迎です。記事提供・投稿の詳細は協会ホームページの「会員のページ」をご覧ください。

配信アドレスの整備などの都合で4月号の発刊が遅くなりましたが、順次が発刊日を月初めに繰り上げてまいります。

*** 編集委員会委員 ***

委員長 藤本 正勝
委員 伊藤 博史 ((株)D&M デノン)
大林 國彦
佐山 恵 (松下電器産業(株))
北村 幸市 ((社)日本レコード協会)
高田 寛太郎 (アムトランス(株))

委員 豊島 政実 (四日市大学)
濱崎 公男 (日本放送協会)
森 芳久 (ソニー(株))
森下 正巳 (バイオニア(株))
山崎 秀男 (早稲田大学)
志村 恒雄

ジャーナル装丁の変遷 (1)



1958 年 4 月 創刊号
Vol.1 No.1 通巻 1 号



1979 年 2 月 誌名刷新
Vol.19 No.1 通巻 56 号



1979 年 8 月 月刊化
Vol.19 No.4 通巻 59 号



1991 年 4 月 デザイン刷新
Vol.31 No.4 通巻 198 号



1997 年 4 月 誌面の刷新
Vol.37 No.4 通巻 270 号



1997 年 4 月 季刊号刊行
Vol.37 No.5 通巻 271 号



2002 年 7 月 年 8 冊刊行に移行
Vol.42 No.7 通巻 341 号



2006 年 4 月 ネット配信初号
Vol.46 No.4 通巻 370 号

ジャーナル装丁の変遷 (2)



1958年4月 創刊号
Vol.1 No.1 通巻1号



1983年2月 通巻100号
Vol.23 No.2 通巻100号



1991年6月 通巻200号
Vol.31 No.6 通巻200号



1999年2月 通巻300号
Vol.39 No.2 通巻300号

節目の各巻目次より

(創刊号・100号・200号・300号)

APRIL 1958	
目 次	
創刊に当って.....	中島健蔵…(2)
協会誌の発刊に当って.....	三熊文雄…(3)
FMチューナーの設計.....	倉掛泰治…(4)
座談会 FM放送を聞いて.....	(12)
新しいステレオディスク.....	岡原勝…(19)
ロープリントテープに付いて.....	林清寿雄…(20)
転写法による映画フィルム用 磁気録音トラック.....	伊達陽…(22)
プロフェッショナル級磁気録音器の新設計.....	中村久次…(24)
高忠実度速度型リボンマイクロホン.....	NHK技術音響研究部…(31)
会 報 欄.....	(33)
編 集 後 記.....	(34)

創刊号目次

1958年4月 Vol.1 No.1 通巻1号



協会のJASジャーナル保存書棚

JAS journal	
Vol. 23, No. 2	
1983年2月号	
目 次	
3	デジタル録音プログラムの編集 穴澤健明
11	ハイ(CrO ₂)ポジション テープの活用法 別所忠夫
18	<連載>オーディオ機器の測定法 カセットデッキ③ 菊地幸夫
27	和鐘の音をさぐる 小松沢 昶
34	<連載>「RECORDING Engineer/ Producer」誌より② '81 グラミー賞受賞 Michael Omartian 氏に聞く 抄訳：沢口真生
43	第72回AESコンベンションに 出席して 妹尾孝憲
47	<連載>アナログ屋のための デジタル・オーディオ講座④ 録音系の概略とその音質改善 穴澤健明
55	日本音響学会 昭和57年度秋季 研究発表会より 音響機器部門 中林克己・若栗 尚 聴覚部門 宮坂栄一 音響音響部門 安藤由典 建築音響部門 今井章久
42・65・74 新刊紹介 54・78 JAS通信	

通巻100号目次

1983年2月 Vol.23 No.2 通巻100号

JAS journal	●特集 コードレス・ヘッドホン／スピーカー
Vol. 31, No. 6 (通巻第 200 号) 1991 年 6 月号	7 コードレス オーディオ システム 松下恵三 10 音声の光デジタル空間伝送方式 中谷 力 14 デジタル光伝送方式コードレススピーカーシステム 石田雅之, 近藤光重, 石田禎宣 17 コードレス ステレオフォンの開発 中山 智 22 世界の録音技術者・音響技術者教育③(日本編) 山海饒太 27 プロ用 DAT の国際規格 相馬喜三 32 言葉・字句・記号 佐伯多門 34 コダック フォト CD システム 弓野正道 39 日本音響学会平成 3 年度春季研究発表会より <電気音響部門>..... 盛田 章, 若栗 尚 <聴 覚 部 門>..... 黒住幸一 <音楽音響部門>..... 安藤由典 <建築音響部門>..... 今井章久 57 英国の Hard Disk Recording コンファレンスより① 山本武夫
▶▶目 次◀◀ 	

通巻 200 号目次

1991 年 6 月 Vol.31 No.6 通巻 200 号

月刊 JAS journal	contents
vol.39 No.3 (通巻300号) 1999年2月号 ¥700 (消費税別) 発行人:中島平太郎 〒104-0045 東京都中央区築地2-8-9 発行所:財団法人日本オーディオ協会 電話 03/3545/1206 FAX 03/3545/1207 JASのロゴ http://plaza2.mbn.or.jp/~JASinfo/	4・プログレッシブ方式について 11・AA 懇話会報告書発行 16・CD ハイライト 18・レコード産業ニュース

通巻 300 号目次

1999 年 2 月 Vol.39 No.2 通巻 300 号



「テープ録音機物語」 その45 戦後の日本 (10)

— ポケット型録音機 —

あべ よしはる
阿部 美春

1. 「ミニホン」 鋼帯録音機 ⁽³⁰²⁾

1952年、ドイツ・ハノーバーのモンスケ社からポケット型ワイヤ式録音機“Minifon”が発売された。

NHKは従来の肩掛け式に代わるものとして、当時NHK演奏設備部の岸包典氏が調査結果を詳しく、「放送技術」誌（昭和28年10月号）に報告されているので、抜粋し紹介する。

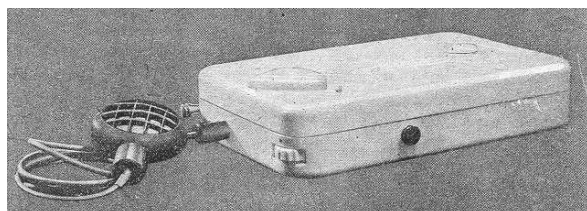


写真 45-1 ミニホン

岸包典氏がミニホンの紹介にあたって、同誌に『直ちに放送録音に加えるかどうかは別問題として、もし、藤倉アナウンサーがおられれば、早速特ダネものを探してくるに違いないような可愛らしい機械といえ、ピッタリとこれを想像していただける。』

昭和28年（1953年）、NHKは試験的に15台、購入し、主要局に配備した（写真45-1）。

1.1 主な仕様

外形寸法： 17 x 11 x 3.5 cm
重 量： 986g（革鞆共 1.2kg）
連続録音時間：最大 2.5 時間
録音ワイヤ径：0.05mm
消去、バイアス方式：飽和磁化消去後、磁気中性点間で偏奇する直流バイアス方式
ワイヤ駆動： 9V 直流モーターによる
真空管： サブミニチュア管
DF67 x2、DL67 x1

マイクロホン：；クリスタル型

受話器： 500Ω電磁型

出力インピーダンス：500Ω（平均出力-10dBm）

乾電池： フライメント用； 1.5V（単3型）

プレート用； 30V（積層）

モーター用； 12V（積層）

1.2 機構部

録音機全体はオーバーコートのポケットに悠々と入れることができ、重さも中身の入ったお弁当程度、琥珀色の尿素樹脂製の容器に収めたまま録音再生することができる。蓋にちょっとでた突起を廻すと、弁当箱の蓋のような部分が外れ、写真45-2のような機構部と電池があらわれる。



写真 45-2

機構部の表面にはワイヤ供給ボビン、巻取りスプール、消去用磁石ヘッドなど録音に必要な一通りの部品が隙間なしには位置してある。さらに、スプリングとボビンを取去るとブレーキパッド、モーター、スプリング・ベルトなどが見える。ブレーキパッドは、起動、停止、巻戻しの各動作のつど、夫々の軸受けへ巧妙ないろいろなブレーキがかかり、毛のような細い録音ワイヤが切れたり、からみついたりする心配は全然ない。

ワイヤを走らせる直流モーターは、動作状態で、

9～12V、50mA でかなり強力な回転力を発生し、回転数は仁丹粒の豆ガバナーによってすこぶる一定に調速される。録音再生のときは、スプリング・ベルト、ウォームギアなどによりスプールを廻してワイヤを引張っている。

巻戻しの場合は、側面のツマミを引張ると、一瞬すべての回転部分にブレーキがかかり、停止したのち、トルクがワイヤボビンの方に切替えられ、録音の2倍くらいの速さで巻戻すことができる。動作中は小さなカムの動きにより、ヘッドは絶えずゆっくりと上下して、ワイヤがスプールに均一に巻かれる。

録音ワイヤの抗張力はかなり大きく、動作中切断することはまずない。もし末端まで来て、急に異常な張力が加わったとしても、末端には丈夫なナイロンの糸が結んであるから切れる心配もなく静かに停止する。

ワイヤボビンには最大 2.5 時間分も巻くことができ、秒速 30 cm/s として、その長さはおよそ 2700 m にも及ぶことになるが、テープに比べると驚く程度、わずかな容積ですむことになり、この辺にワイヤの特色が見出されるわけである。ワイヤは細く、すこぶる柔軟であって、ヘッドに対する接触圧は低くて十分な接触が保たれる。ワイヤが軟らかいことは機構部を単純化し、また、ヘッドの摩耗を軽減する重要な性質となる。

消去は消去用磁石を所定の位置まで廻し、ワイヤに磁極を接触させて、磁気飽和させて消去をする。これらの録音、再生、消去の各操作はすべて蓋をかけたまま、外部から操作できる。

全般的にみて、機構部が本機の最もドイツ製らしい特徴のある部分であって、材料の優秀なこと、加工精度のよいことなどが注目を置く点である。

1.3 増幅器

増幅器は機構部の内側にこじんまりと纏められ、1 枚のベーク板の裏表に超小型の抵抗、コンデンサー類が取り付けられてある。部品や構造は全く補聴器の通りで格別新しい点はない。回路は付図 45-01

に示すように、3 本のサブミニチュア管からなり、録音再生の切替をジャック J1 で行っている点が面白い。すなわち、J1 はマイクと受話器共用になっていて、録音再生の切替は、長短二種類のプラグによって行う。マイクの方は短いプラグで、録音に必要な状態で接続され、受話器の方のプラグはそれより少し長く、差し込んだとき、レバー・スイッチを押し開き、再生の接続になる。

また、J1 にフィラメントの接点がついており、プラグを抜いた状態では、フィラメント回路が切られ、乾電池が無用に消耗しないよう配慮している。

出力管のプレート回路の接続は、録音のときは $3k\Omega$ のヘッドに直接プレート電流を流し、その直流分でバイアスをとっている。

また、再生では $72k/500\Omega$ の変成器に切替え、受話器もしくは直接 -10dbm 程度の出力がとりだせる。フィラメント・スイッチ SW1 とモーター・スイッチ、SW2 は、ブレーキレバーと一本の共通の棒に連結されていて、スイッチを引くと一緒にプレートが外れ、モーターと増幅器が起動する仕組みとなっている。

マイクは普通のクリスタル型、レシーバーは 500Ω の可動鉄片型で、一つのユニットから、聴診器型の二本の音管に分岐して両耳型としたもので、別に必要あれば耳殻用イヤピース（イヤホン）とも交換できる構造となっている。

1.4 電 源

3 種類の乾電池が用いられ、所要放電電流は極めて少なく、長時間使用できる。この中で、モーター用電池がやや特殊である他は、市販品のものに合う。

交流電源のとれる場合は、付属の外部整流器のプラグを差し込むと、交流で切換え使えるようになっている。

1.5 特 性

録音再生総合周波数特性は図 45-2 のように、周

波数特性は 1,200Hz 付近を中心とした極めて狭い帯域のものである。また、ヘッドムームは 既定の録音レベルに対し、6dB である。マイクを通した実際の音声の録音では、明瞭度、ひずみとも実用上十分であり、個性もある程度表現できる程度である。雑音は-30dB 程度で、これは主に、モーターの整流子からのものが大部分で、ついで、真空管雑音ワイヤのきしむ音となる。

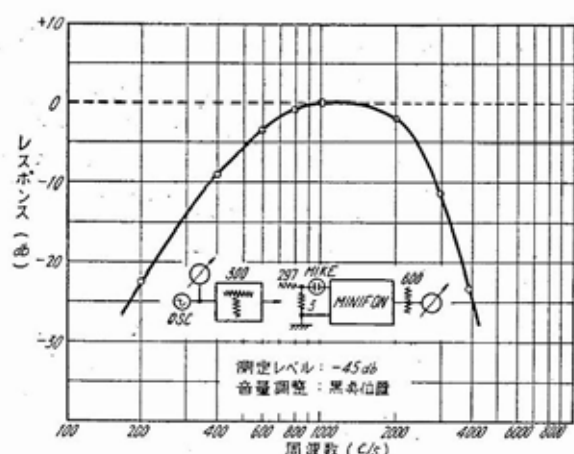


図 45-2 録音再生総合周波数特性

回転ムラは、巻取りスプールのハズミ車効果を大きくし、ダイナミックバランスを注意深くとっているため、割合良好で、音声では歩行中録音しても不自然さは感じられない。消去は、録音ワイヤにあらかじめ消去の際、飽和磁気を与えておき、録音バイアスを加えて、無信号時ワイヤを中性点に引戻し、雑音とひずみを低減する直流バイアス方式の本来の効果が満足されている。

1.6 動作

本機の動作はすこぶる確実で、小型であるが、事故は少ない。これはジャック類の電気接点の優秀な材料と機構部の加工による。

どのように起動、停止、巻戻し操作を行っても、機構部の停止ブレーキとスイッチの連動が確実であるから、ワイヤの緩みを生じたり、衝撃的な負荷のかかることがなく、ワイヤのからみ、断線などの事故は無く、かえって不注意にワイヤスプールを取り

外した場合などの方が余程危険なことが多い。

1.7 ミニホンの新型

1960 年、ミニホンの新型 P-55 型（製造元はドイツ、ハノーバーのプロトナ社に代っている）が米国で発売された（\$249.50、写真 45-3）。操作がプッシュボタン式に、録音ワイヤ速度が S 型（34cm/s、2 時間 20 分）と L 型（22cm/s、5 時間）の 2 機種、重量は 670g になった。



写真 45-3 ミニホン P-55 型

2. 「ミゼテープ」テープ録音機 (303)(304)

2.1 概要

「ミゼテープ」(Midgetape)は前掲の「ミニホン」の着想を土台にして、これを米国流に完成させたものと思われ、なかなか興味深いポケット型録音機である(写真 45-4、1955 年)。以下、岸 包典氏がミニホンに続いて放送技術誌（昭和 30 年 9 月）に詳しく紹介されているので、その一部を抜粋する。

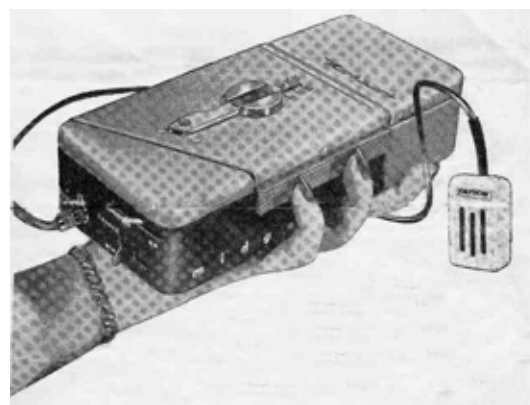
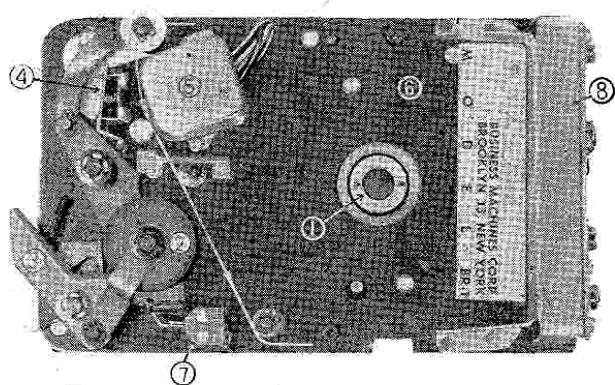


写真 45-4 ミゼテープ

ミニホンはワイヤ式であるために宿命的に現業機器としてあまりに脆弱であるという欠点が見受けられるが、この「ミゼテープ」はミニホンの欠点を見事に解決しており、その小型軽量の点で、現用のショルダー（肩掛け）型にとってかわるべきものということができ、放送記者の取材活動がいよいよ容易となって、番組面でも新しい分野が拓けるものと期待された。表 45-2 に本機の主な仕様を示す。

使用テープ	1/4インチ幅、Scotch No.190 長さ300フィート
テープ速度	1-7/8 inch/s
トラック形式	ハーフトラック
収録時間	片道30分、往復1時間
録音方式	消去：直流 録音：交流ハイパス
動力 電源	小型モーターからスプリングベルト駆動 フィラメント：1.5V 水銀乾電池 プレート：30V積層乾電池 F.P.とも45時間持続 モーター：9.1V水銀乾電池 100時間持続
使用真空管	レイセオン サブミニチュア管 CK549DX x2 CK542DX x1
入出力インピーダンス	入力：クリスタルマイク 出力：500Ω
外形寸法	21x10x4.8 cm
重量	1.5kg

表 45-2



- ①巻取りリール軸 ⑤録音消去ヘッド
②ピンチローラー ⑥テープマガジンを置くところ
③起動レバー ⑦電源スイッチ
④フェルトパッド ⑧電池スナップ端子

写真 45-5

この録音機の最も優れた特徴は、テープをマガジン入りとしたことで、この方式を採用したことによって、供給リールと巻取りリールを平面的に配列する従来の一般的な構造概念を打ち破り、テープ録音機の形状を著しく縮小することに成功している（写真 45-5）。

2.2 テープマガジン

テープマガジンは写真 45-6、写真 45-7 のように 1 個の金属ケースの中に供給リールおよび巻取りリールを上下 2 段に重ね合わせたものであって、テープは一方のリールから他のリールにリング状をなして巻き込まれる構造で、テープは、ケースから露出した部分をキャプスタンとヘッドに引っかけて録音再生を行うのである。リールのハブには 8 個の小穴があけてある。この穴は、巻取り軸のピンを引っかけて、巻取りリールを回転させ、また、金属ケースの上蓋にある巻戻しハンドルのナイロン製の爪を引っかけてテープの巻戻しを行うのに使われる。



写真 45-6

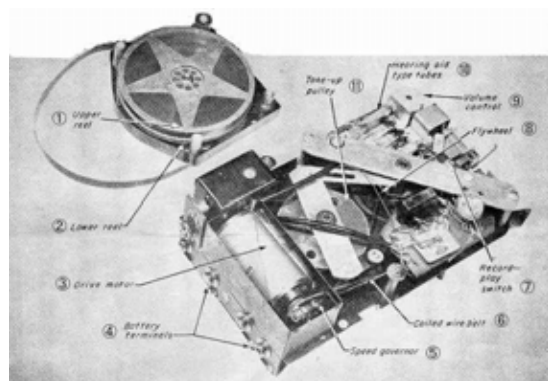


写真 45-7

また、テープマガジンの中心軸にはフロートピンと称する凸起があって、蓋についている巻戻しハンドルを操作位置にすると、このフロートピンが、巻取り軸を下方に押し込んで、ドライブピンが外れ、テープの巻戻しを容易にした構造である。

駆動力が始めから限定されているので、このリールマガジンは材質が優秀、加工精度も上等で、よく円滑に回転する。中心部のハブは、ナイロン樹脂でできている。マガジンケースは1条の細い覗き窓があって、操作中テープの残り具合を見ることができ、テープが送られていることを示すインジケータとなっている。

テープマガジンに巻かれた300フィート（フィート）のテープの両端には拡張力の特に大きいポリエステルベースのリーダーテープは貼り付けてあって、供給リールのテープがなくなってもスリップのまま切断しない配慮がしてある。

2.3 機構部

薄鋼板製の外箱から機構部を取り出すと、写真45-5および45-7のようになり、1枚の2mm鋼板を中心として、その両面にモーター、キャプスタン・フライホイール、増幅器など扁平に組み立てられている。したがって、裸の状態でも各部を点検できるので、補修は比較的容易である。

キャプスタン軸はボールベアリングで支持され、全面に広がった薄いフライホイールが付いていて、モータープーリーとは柔いスプリングベルトで結合されているので、ハズミ車効果をもち、フラッターを少なくしている。ケースの外側に突出した起動レバーを起こすと電源、スイッチ、ヘッドの圧着パッド、ピンチローラーなどが連動し、テープを送ることになる。乾電池はすべて電池室に収容され、5個のスナップ端子で接続される。

振動に対しては金属箱体の内部、キャプスタン・フライホイールなど共振しやすい部分に一面に防振ゴム塗料が塗布してあり、かなりの効果を挙げている。

2.4 駆動用モーター

超小型の直流モーターの電源は約9V、70mAを要し、300rpmで約25g-cmのトルクを出す。モーター軸に調速ガバナーが付いていて、そのフライホイールの遠心力で接点が断続し、電池と直列に入れた抵抗を約50Hzで開閉することにより、電池の電圧1.5Vの変動範囲で調速効果を得ている。

このモーターはドイツ製で、その内部構造は特に変わった点はないが、小型化するためにずいぶん思い切った設計である。界磁は円筒磁石で、特に凹凸がない。磁石はモールド成型されている。抗磁力がきわめて大きく、透磁率の小さい新しい材料と考えられ、2つの磁極は着磁工程でつけたものである。

回転子は普通の8極のもので、その回転軸は自動調心のオイルレス・ベアリングで支持されている。

ガバナー用抵抗器の一部に豆ランプが使われていて、ガバナー接点の断続の都度明滅する。したがって、このランプの明るさをみるとモーター電池の消耗状態が判る。

2.5 録音再生増幅器

増幅器部は1枚の薄いベークライト板の両面に、実にうまく扁平にまとめられている。抵抗器類の大部分がこじんまりとプリント配線にまとめられているため、配線らしいものも殆どなく、簡潔なものである。

使用真空管はレイセオン社のサブミニチュア管が3本使われている。接続回路は付図45-02のとおりである。交流バイアスは出力トランスの2次巻線から微小容量で反結合して、約12kHzを発振させて、そのグリッド側から信号電流と一緒にして録音ヘッドに供給している。消去電流（直流）はフィラメント電池からとりだしている。

2.6 総合周波数特性

録音再生の総合周波数特性は図45-3のとおりで、テープ速度が遅いことと、周波数補償がほとんどされていないため、決してよい特性とは言えない。

が、音声帯域を一応カバーしているの、会話などは十分な明瞭度をもっている。SN 比は先頭録音レベルで約 35dB 程度である。聴感上ワイヤ式のような摩擦音がないだけにミニホンより聴きやすく、収録レベルに注意すれば、実用上問題なく、この雑音は大部分がモーターのコンミューターの摺動音と回転振動によるマイクロホニックである。

ワウ・フラッターは意外に少なく、1%くらいで、音声では感知できない程度である。

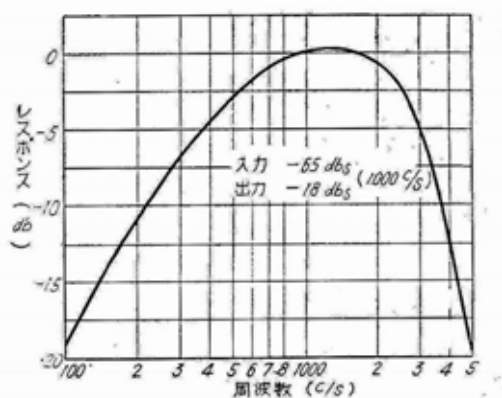
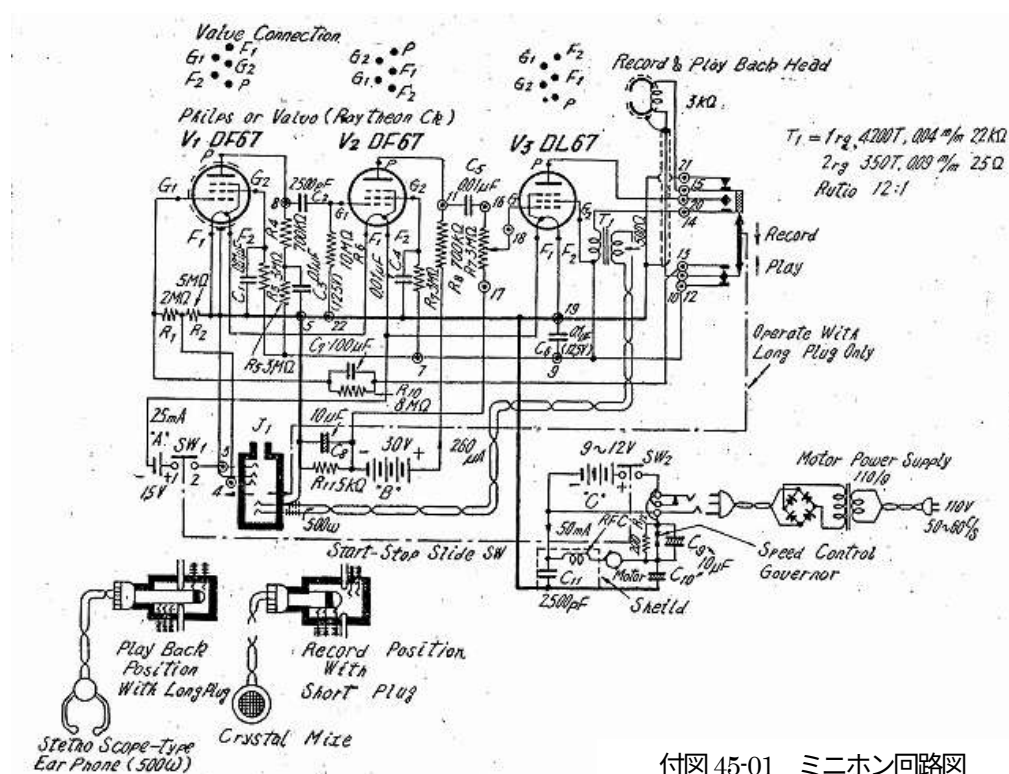


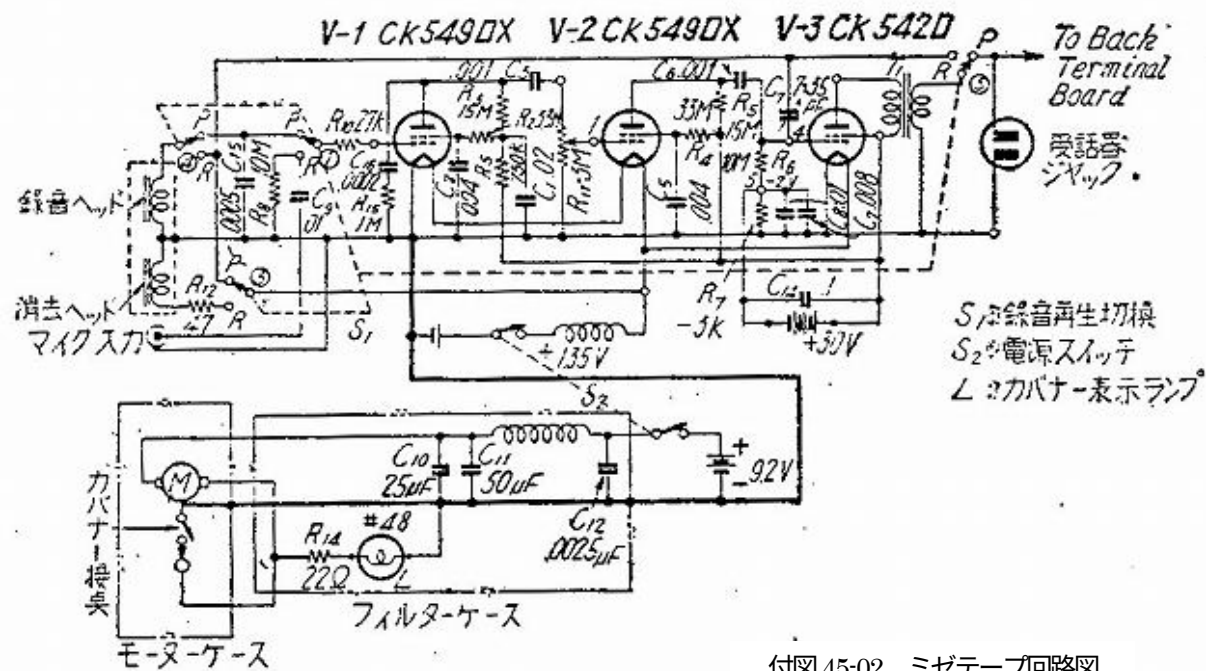
図 45-3 録音再生総合周波数特性

【参考文献】

- (2) 日本オーディオ協会編「オーディオ 50 年史」
VIII 磁気録音(1986.12)
- (302) 岸 包典「Minifon ポケット型ワイヤ・レコーダー」放送技術 (1953.10)
- (303) 岸 包典「ポケット型テープ録音機、ミゼテープ」放送技術 (1955.09)
- (304) Product Design 「Miniaturization Secret of Midget Tape Recorder」 Product Engineering (1955.02)



付図 45-01 ミニホン回路図



付図 45-02 ミゼテーブ回路図



「テープ録音機物語」

その46 戦後の日本 (11)

— ポケット型録音機 (2) —

あべ よしはる
阿部 美春

3. 国産のポケット型テープ録音機 (305)

1956 年 (昭和 31 年) 4 月、NHK の協力で、米国モホーク社の「ミゼテープ」をモデルに東通工 (SONY*1) によって国産のポケット型テープ録音機 (NHK PT-52 型) が完成した。(写真 46-1)。



写真 46-1 PT-52 型録音機

「ミゼテープ」に比べ、増幅器がトランジスターであることが大きな特徴である。そのため、乾電池の消耗が少ない。イヤホンによる録音中のモニターができる、マジックアイによる録音状態を検知できる、など。

以下、概要を紹介する。

(注*1) 昭和 30 年 2 月、東通工製品に SONY のマークを使用

3.1 定 格

テープ:	Scotch #122 *2 専用マガジン(KM-5 型)装填 テープ長; 約 92m
録音時間:	片道 15 分、往復 30 分
録音トラック:	ハーフトラック
テープ速度:	9.5 cm/s
録音周波数範囲:	200Hz~5 kHz
バイアス:	交流バイアス方式 (約 50 kHz)
電源電圧:	モーター用; 8V±1V 増幅器用; 6V
トランジスター:	増幅用; SONY 2T65 x6 バイアス発振用; SONY 2T65 x2
マジックアイ:	ナショナル 1N5 x1
ヘッド:	録音再生用; SONY PP2-10 インピーダンス 12Ω 消去用; なし
モーター:	直流 8V、電気がハナ付 マイクロモーター (CLSR-2A2) 回転数; 3,000rpm 消費電流; 40~60mA
外形寸法:	約 190 x 150 x 60 mm
重 量:	約 2kg (マイク別)
マイクホン:	ダイナミック型 (FF-20 型、25kΩ)
イヤホン:	クリスタル型片耳式
再生出力:	内部インピーダンス; 2Ω 解放出力電圧 0.043V(-25dBs)
電 池:	モーター用; 6AAM (9V) 増幅器用; 4AAM (6V、リック乾電池) または、単 3 乾電池を 6 個+4 個の付属電池ケースにに入れて使用

(注*2) Scotch #122 テープ：1.5ミル (35 μ m) 厚、ポリエ
ステル・ベース、高出力タイプのテープで、温度湿
度の変化に強く、シリコン潤滑が施されているうえ、
耐熱性バインダーが用いられているため、摩擦、摩
耗は少なく、テープの寿命はスタンダード・テープ
の2.5倍ある。

3.2 構造

(1) 構成

軽金属性きょう体内に、機構部、増幅部、テー
プマガジン、電池などが収納され、操作面には操
作レバー、巻戻しハンドル、録音レベル調整ツマ
ミ、録音再生切替スイッチ、録音指示管、および
3個のコンセント」(マイク、イヤホン、再生出力)
がある。

(2) 増幅器部

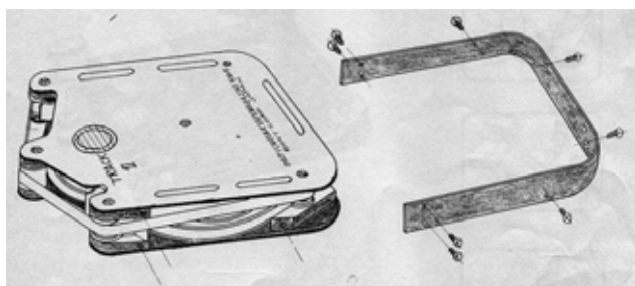
エッチング印刷配線を施した基板上にすべて
の回路部品が設置されている。

(3) テープ駆動方式

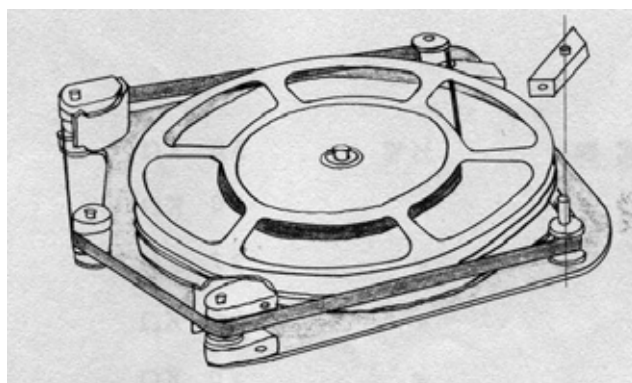
モーターの回転をスプリングベルトにてキャ
プスタン軸に伝え、ゴムローラーを介してマガジ
ン内のテープを駆動させる。

(4) テープマガジン

同軸上に重ねられた2個のリールは渦状スプ
リングを介して連動し、常にテープを巻込む方向
に回転力が与えられているので、テープは常に適
当な張力を保ちつつ繰出されたテープが自動的に
巻取り側のリールに巻込まれる構造になっている
(図46-1a・b)。



(a)



(b)

図46-1 テープマガジン

3.3 性能

(1) 機構部

テープ速度偏差；テープ両端付近で $\pm 5\%$ 以内
中央付近で $\pm 1\%$ 以内
ワウ・フラッター 1.5%以下 (尖頭値)

(2) 録音増幅器

利 得： -65db以下、@1kHz、SRL (飽
和録音レベル)

録音周波数特性：図46-2の範囲内

SN比： 45dB以上、@1kHz、-75dBs
入力、ORL (動作録音レベル)

ひずみ率： 3%以下、@1kHz、-75dBsORL

モニター回路：クリスタル型イヤホンで視聴
イヤホン出力；+5db

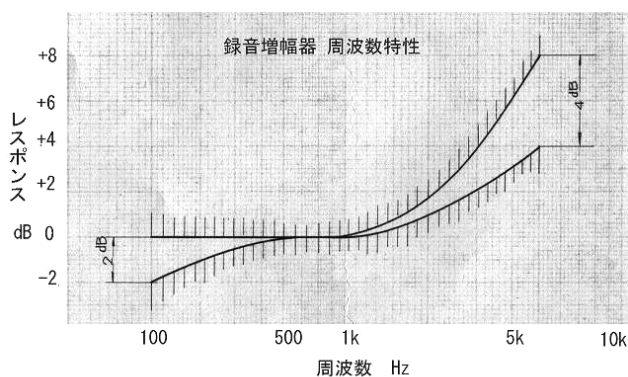


図46-2 録音増幅器周波数特性

(3) 再生増幅器

利 得： 1kHz、-49dBs 入力で

イヤホン出力； +3dBs

SN 比：1kHz ORL を録音し、前項再生系で再生したとき、35dB 以上

再生出力； -2.5dBs

(4) 総合特性：

周波数特性

BTS5313 (磁気録音標準テープの T7.5 型で平坦な特性が得られる再生系で再生したとき、図 46—3 の範囲内

(5) 電池寿命 (実装電池の連続使用可能時間)

モーター用； 約 4 時間

増幅器用； 約 6 時間

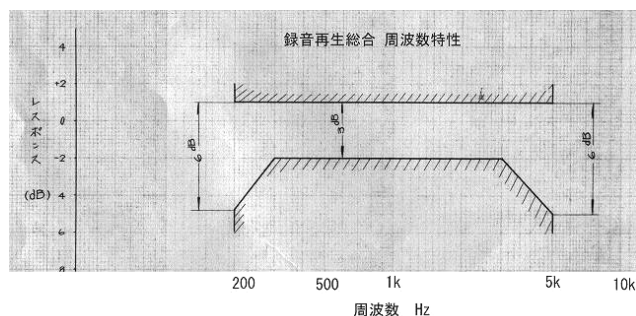
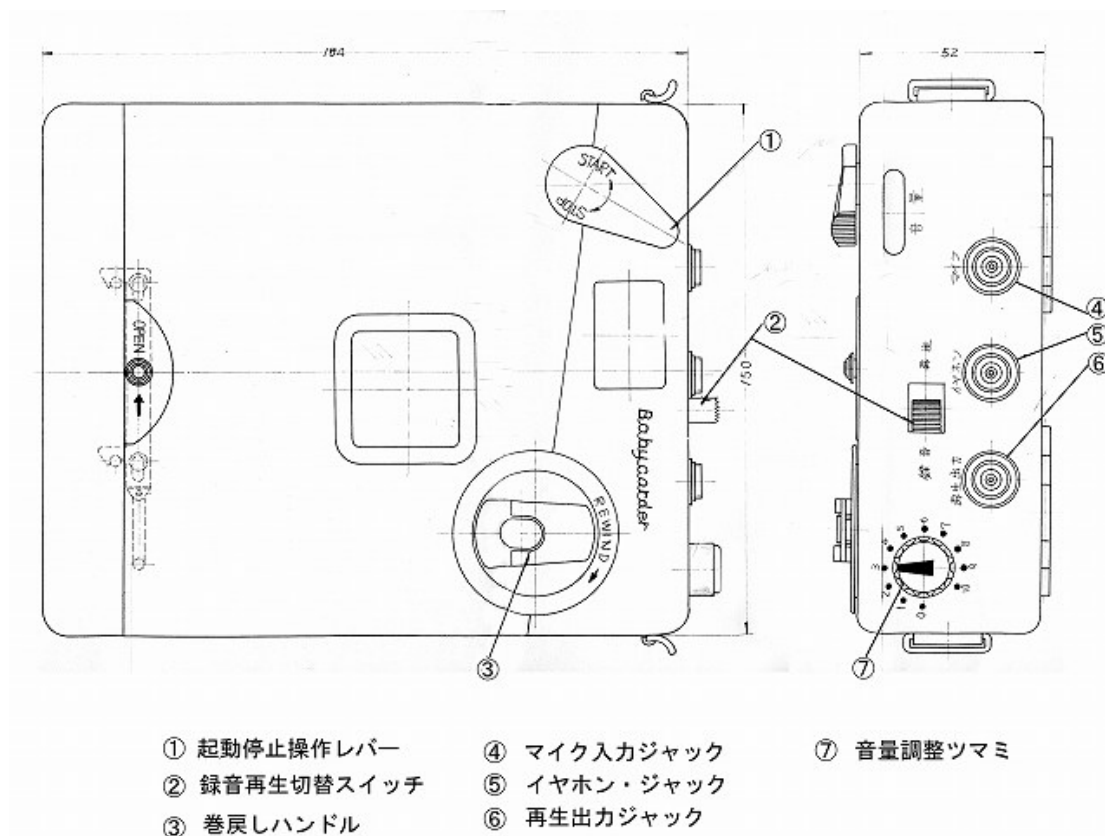


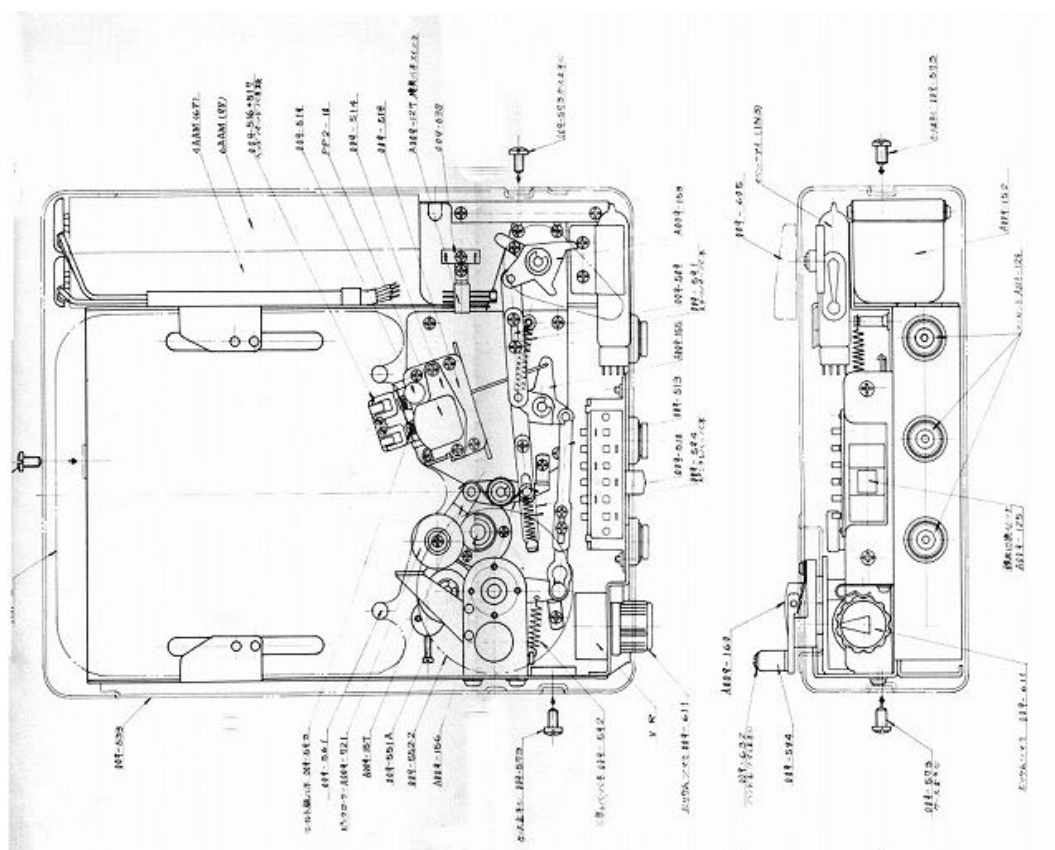
図 46-3 総合周波数特性

【参考文献】

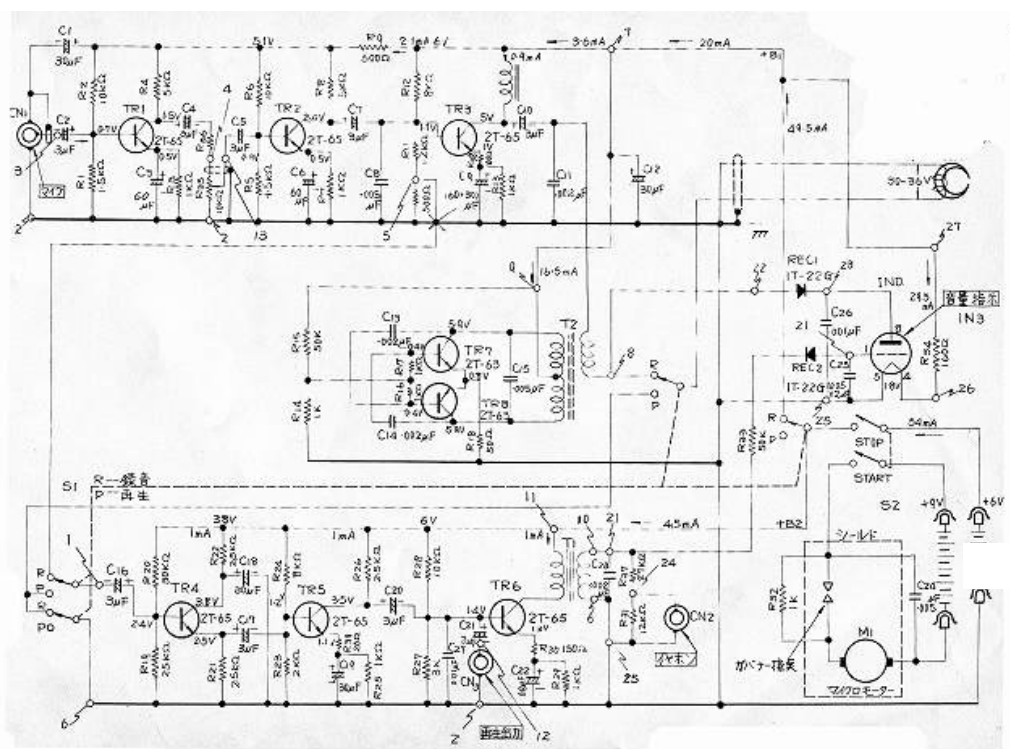
- (305) 「PT-52 型 ポケット型録音機 取扱説明書」、
第3版、ソニー(株) (1960.02)



付図 46-01 PT-52 型



付図 46-02 PT-52 型機構部



付図 46-03 PT-52 型回路図

JAS Information

2009 年度「音の日」関連行事



「音の日」行事について

トーマス・エジソンが 132 年前の 1877 年に世界で初めて蓄音機「フォノグラフ」を発明した 12 月 6 日をオーディオ誕生の「音の日」として 1994 年に制定し、(社)日本レコード協会、(社)日本音楽スタジオ協会など音に関連する諸団体と協力して記念行事を行っています。本年は暦の関係で記念行事を 12 月 3 日(木)に繰り上げ実施しました。

「音の日」には、広く音を通じて文化や生活に貢献した方々を顕彰する「音の匠」の贈呈式と、音楽や放送番組の制作現場で優れた録音制作に貢献したエンジニアを表彰する「日本プロ音楽録音賞」の授与式が東京・秋葉原・アキバプラザで行なわれ、多くの報道取材もあり、音の文化や技術の素晴らしさを多くの人達にお伝えすることができました。

また、できるだけ多くの人々に「いい音」を体感していただき音の素晴らしさに触れていただくための「音の日」視聴体験キャンペーン 2009 も、多くの会員会社ショールーム等で「音の日」を中心に実施されています。

「音の匠」顕彰

第 14 回目にあたる本年度は、最古の再生音楽機器として現代においても根強い人気で人々を癒し続けているアンティークオルゴールの世界で、とりわけ伝統あるアンティークオルゴールの技術と音を現代に継承する修理技術で永らく活躍されている個人の方として「オルゴールの小さな博物館」の井上正二郎さん、「おでんせ」の大谷勲さん、「ハイランドアンティーク」の大森裕武さんの三人を「音の匠」として顕彰しました。

さらにアンティークオルゴールの技術と音を現代に継承するための「オルゴールの小さな博物館」運営とメカニックの育成によりアンティークの完全

な形で再現を行い、感動を提案し続ける活動、および各種アンティークオルゴールに関する著作、CD 製作を通じた普及活動に対し「オルゴールの小さな博物館」館長の名村義人さんを「音の匠特別功労賞」として顕彰しました。

賞状と楯ならびに副賞が校条会長より贈られ、「音の匠」顕彰に協賛をいただいた電波新聞社殿より記念品が贈られました。

受賞者を代表して名村さんからオルゴールの歴史を紹介いただきました。オルゴールは教会の時計台から始まり、それが小型化して家庭に入り、時計としての機能が外れ音楽のみを聴く機器となったことをデモも交えて説明いただきました。

さらにシリンダータイプから曲を代えられるディスクタイプになったが、エジソンの蓄音機によりオルゴールは駆逐され、一方の蓄音機もエジソンのシリンダーからベルリナーのディスクへと、オルゴールと同じ道を辿ったと話されました。

「音の匠」井上 正二郎 様



「オルゴールの小さな博物館」

(東京都文京区) メカニック担当)

現在の「オルゴールの小さな博物館」を含め約 20 年間アンティークオルゴールの修理を行なう。

古典技術の復活を心がけ、昔と同じ音を出すため部品、材料にもこだわり、自ら部品の復元も行なう。

「オルゴールの小さな博物館」が所有するシリンダ

ータイプ、ディスクタイプオルゴール、自動ピアノ、
ストリートオルガン等多種多様なカテゴリーの修
理・修復作業を行い、古の技術を今日に伝えている。

「音の匠」 大谷 勲 様



(オルゴール、蓄音機など修理全般の
「おでんせ」(神奈川県相模原市) 経営)

1970 年頃よりアンティーク時計類の修理に従事。
オルゴール修理の草分け。19 世紀の音響機器の音を
再現するため、使われている部品の復元から手がけ
る。アンティーク時計はもとよりシリンダータイプ、
ディスクタイプ、オートマタまで幅広く各地の博物
館などからの依頼にその技で応えている。

「音の匠」 大森 裕武 様



(オルゴール修理工房「ハイランドアンティーク」
(神奈川県横須賀市) 経営)

1978 年頃アンティークオルゴールに出会い、メカ
と音楽の両要素を備えたオルゴールに引かれ修理の
専門家となる。1985 年頃から「ハイランドアンティ
ーク」をかまえ活動。MBSI(国際オルゴール協会)日
本支部を通じ、後継者の指導も積極的に行なってい
る。著書にオルゴール修理技術のバイブルともされ
ている「オルゴール修理の実技」がある。

「音の匠特別功労賞」 名村 義人 様



(オルゴールの蒐集家・研究家

東京都文京区の「オルゴールの小さな博物館」館長)

1983 年自宅を開放して日本で最初のオルゴール
博物館をスタート。18 世紀末から 20 世紀のシリン
ダータイプ、ディスクタイプ、自動演奏オルガン、
自動ピアノ、オートマタ等動作品を系統だてて展示
(所蔵約 400 点)。またアンティークオルゴールに
ついての啓発活動を積極的に行なっている。
著書に「オルゴールの詩」(音楽の友社)、「たたくさ
んのふしぎ オルゴール誕生」他多数。CD 製作も多数
あり。



実演中の名村様



受賞の皆様

日本プロ音楽録音賞

第16回日本プロ音楽録音賞には、4部門合計75作品(部門A 28作品、部門B 24作品、部門C 6作品、部門D 17作品)の応募があり、各部門の最優秀賞4作品、部門A、B、Dの優秀賞6作品、ベストパフォーマー賞1作品、アビット賞1作品が受賞し、「音の日」に表彰されました。

**部門A 「2ch パッケージメディア」
(クラシック、ジャズ等)**

最優秀賞

「Jazz Impression」より「Meteor」**渡辺 香津美**
(株) イーストワークスエンタテインメント

(EWSA0163)



鈴木 浩二(Main Engineer)

(株) ソニー・ミュージックコミュニケーションズ

鈴木 浩二 (Mastering Engineer) 同上

波多腰 英靖(Assistant Engineer) 同上

優秀賞

「AMBITIOUS」より「Red Sprite」**森**
ビクターエンタテインメント (株) (VICL-63167)

秋元 秀之(Main Engineer)

ビクターエンタテインメント(株)

川崎 洋(Mastering Engineer)

FLAIR MASTERING WORKS

八反田 亮太(Assistant Engineer)

ビクターエンタテインメント (株)

優秀賞

「うたをうたうとき」より「Face to Face」**DiVa**
troubadourcafe/地底レコード (TRBR-0013)

佐藤 洋(Mastering Engineer)

コロムビアミュージックエンタテインメント(株)

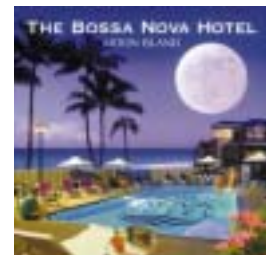
塩澤 利安(Recording Engineer) 同上

**部門B 「2ch パッケージメディア」
(ポップス、歌謡曲等)**

最優秀賞

「MOON ISLAND」より「AFTER THE LOVE IS GONE」
THE BOSSA NOVA HOTEL
(株) EMI ミュージック・ジャパン

(TOCP-70756)



THE BOSSA NOVA HOTEL(Main Engineer)

渡辺 昭人(Mastering Engineer)

(株) EMI ミュージック・ジャパン・スタジオ

優秀賞

「SKOOP ON SOMEBODY」より「I Want You」
Skoop On Somebody

SME Records Inc. (SECL717)

宮坂 保彦(Main Engineer) (株)一口坂スタジオ

酒井 秀和(Mastering Engineer)

(株)ソニー・ミュージックコミュニケーションズ

優秀賞

「No Reason〜オトコゴコロ〜」より「Everlasting Love」
高橋 真梨子

ビクターエンタテインメント (株) (VICL - 63338)

梅津 達男(Main Engineer) (株)ミキサーズラボ

川崎 洋(Mastering Engineer)

FLAIR MASTERING WORKS

桑野 貴充(Assistant Engineer)

ビクターエンタテインメント(株)

石 光孝(Assistant Engineer) (株)ミキサーズラボ

部門C 「サラウンドパッケージメディア」

(SACD,DVD- Audio,DVD-Video,
Blu-rayDisc のマルチ ch サラウンド)

最優秀賞

「グレート・エンカウンター 林英哲 with オーケストラ(「空叩光初白。」ライブ)」より
「石井真木「モノプリズム」日本太鼓群とオーケストラのための」 林 英哲

キングレコード (株)

(KIGS2) SACD



小貝 俊一(Main Engineer) (株) フロレスタン

安藤 明(Mastering Engineer)

(株) キング関口台スタジオ

高橋 邦明(Technical Engineer) 同上

吉越 晋治(Assistant Engineer) 同上

部門D 「放送メディア」 (放送作品)

最優秀賞

「オーケストラ・アンサンブル金沢の調べ」
「熱狂の日」音楽祭 2009～モーツァルトがいっぱい～よりモーツァルト クラリネット協奏曲
イ長調 K.622 第2楽章 Adagio

指揮:井上道義、オーケストラ・アンサンブル金沢、
ポール・メイエ

北陸朝日放送 (株) HDTV 5.1ch

2009 年 6 月 20 日放送



秋田 裕介(Main Engineer) (株) 放送技術社

北川 嘉市郎(Second Engineer)北陸朝日放送 (株)

山中 康男(Second Engineer) 朝日放送 (株)

優秀賞

「第 41 回思い出のメロディー」より「ロマンス」

岩崎 宏美

NHK HDTV 5.1ch

2009 年 8 月 22 日放送

福島 芳樹(Main Engineer) 日本放送協会

中鉢 由希(Second Engineer) 同上

永田 隆信(Second Engineer) 同上

鈴木 勇一(Audience mix) 同上

優秀賞

「平等院音舞台」より「ブエノスアイレスの秋」

ジョシュア・ローマン

(株) 毎日放送 HDTV 5.1ch

2008 年 10 月 5 日放送

田中 聖二(Main Engineer) (株) 毎日放送

杉本 誠 (Second Engineer) 同上

金谷 宣弘(Assistant Engineer) 同上

北川 浩康(Assistant Engineer)

(株) サウンドエースプロダクション

ベストパフォーマー賞

「2nd ALBUM」より「From Into The Grey Sky」

今 剛 (音楽家、ギタリスト)

エイベックス・マーケティング (株)

(IOCA-20284)



アビッド賞

「宵祭り」より「宵祭り」 里 アンナ

(株) チャプター・ワン

(CHCB-10087)



瀧田 二郎(Main Engineer) フリーランス

川崎 洋(Mastering Engineer)

FLAIR MASTERING WORKS

田中 武(Recording Engineer) フリーランス

音の日のつどい

「音の匠」顕彰式、日本プロ音楽録音賞授賞式に続いて行なわれた「音の日」のつどいには、受賞者の方々と協会会員有志ならびに関連団体の皆様が出席し、なごやかな懇親会が行なわれました。



校條 亮治会長の主催者代表挨拶



内沼 映二 (社)日本音楽スタジオ協会会長の乾杯



「音の匠」の紹介で自動楽器を披露する名村様



会場に展示されたオルゴールの小さな博物館所蔵の貴重なディスクオルゴール



歓談中の皆様